

武蔵野日曜集会 復活節

我を愛するか、わが羊群を牧え

——ヨハネ伝第20、21章——

1981年4月19日（武蔵野）

小池辰雄

「おんなよ、何ぞ泣くか」「平安なんじらに在れ」「マリヤよ」「わが主よ」「聖霊をうけよ」
 キリストの栄光の証者「イエスは十字架に」そこに御霊のキリストが生きているか「私を
 本当に愛しているか」十字架で私を愛してくださったペテロの召命

【ヨハネ20】

1 一週のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたり
 て墓より石の取除けあるを見る。乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの
 愛し給いしかの弟子との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処
 に置きしか我ら知らず』。3 ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。4 二人とも
 に走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、5 屈みて布の
 置きたるを見れど、内には入らず。6 シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて布
 の置きたるを視、7 また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに
 巻きてあるを見る。8 先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信す。
 9 彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟ら
 ざりしなり。10 遂に二人の弟子おのが家にかえり。

11 然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて、墓の内
 を見るに、12 イエスの屍体の置かれし処に白き衣をきたる二人の御使、首の
 方にひとり足の方にひとり坐しいたり。13 而してマリヤに言う『おんなよ、
 何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰か、わが主を取去れり、何処に置きしか我しらず』
 14 かく言いて後に振反れば、イエスの立ち居給うを見る、然れどイエスたる
 を知らず。15 イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤ
 は園守ならんと思ひて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置き
 しかを告げよ、われ引取るべし』16 イエス『マリヤよ』と言ひ給う。マリヤ
 振反りて『ラボニ』（釈けば師よ）と言う。17 イエス言い給う『われに触るな、
 我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち
 汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」といえ』18 マグダラのマリヤ行き
 て弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々の事を言い給いしと告



げたり。

¹⁹この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』²⁰斯く言いてその手と脅とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。²¹イエスマた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣わし給えるごとく、我も亦なんじらを遣わす』²²斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊をうけよ』²³汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とどめらるべし』

²⁴イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、²⁵他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマス言う『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらざれば信ぜじ』

²⁶八日ののち弟子等また家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じおきしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』²⁷またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信する者となれ』²⁸トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』²⁹イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信する者は幸福なり』

³⁰この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。³¹されどこれらの事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

【ヨハネ21】

¹この後、イエス復テベリヤの海辺にて己を弟子たちに現し給う、その現れ給いしこと左のごとし。²シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに居りしに、³シモン・ペテロ『われ漁獵にゆく』と言えば、彼ら『われらも共に往かん』⁴と言ひ、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。⁵夜明の頃イエス岸に立ち給うに、弟子たち其のイエスなるを知らず、⁶イエス言い給う『子どもよ、獲物ありしか』彼ら『なし』と答う。⁷イエス言いたもう『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』すなわち網を下ろしたるに、魚夥多しくして、網を曳き上ぐるること能わざりしかば、⁸イエスの愛し給いし弟子、ペテロに言う『主なり』シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸なりしを上衣をまといて海に飛びいれり。⁹他の弟子たちは陸を離るること遠からず、僅に五十間ばかりなしかば、魚の入りたる網を小舟に曳き来り、¹⁰陸に上がりて



見れば、炭火ありてその上に肴さかなあり、又パンあり。¹⁰ イエス言い給う『なんじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』

¹¹ シモン・ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げしに百五十三尾びの大なる魚満ちたり、斯く多かりしが網は裂けざりき。¹² イエス言い給う『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『なんじは誰ぞ』と敢えて問う者もなし。¹³ イエス進みてパンをとり彼らに与え、肴をも然なし給う。¹⁴ イエス死人の中より甦よみがえりてのち、弟子たちに現れ給いし事、これにて三度なり。

¹⁵ 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝まさりて我を愛するか』ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羔羊こひつじを養え』¹⁶ また二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羔羊を牧かえ』¹⁷ 三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。¹⁸ 誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』¹⁹ 是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』。²⁰ ペテロ振反りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。これはさきに夕餐ゆうげのとき御胸によりかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と問いし弟子なり。²¹ ペテロこの人を見てイエスに言う『主よ、この人は如何に』²² イエス言い給う『よしや我、かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝になにの關係かかわりあらんや、汝は我に従え』²³ ここに兄弟たちの中に、この弟子死なずと云う話つたわたりたり。然れどイエスは死なずと言い給いしにあらず『よしや我かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝はなにの關係あらんや』と言い給いしなり。

²⁴ これらの事につきて証をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、我等はその証の真なるを知る。²⁵ イエスの行い給いし事は、この外なお多し、もし一つ一つ録さば、我おもうに世界もその録すところの書を載するに耐え

●「おんなよ、何ぞ泣くか」

ヨハネ伝20章を見ましよう。

1 一週ひとしゅうのはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて



墓より石の取除けあるを見る。²乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子

ヨハネのことです。「イエスの愛したまいし」とか、「胸によりし」とかいう言い方が時々でてくるんですが、これは特にヨハネがそういうことであつた。この「愛する」という字は「アガパオー」ではなくて、「フィレオー」という字が使つてある。人間的な気持の加わつた愛という字です。もちろん、愛には、神さまの愛は現われ方がいろいろであつて、本質が違ふわけではないけれども。

との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』
³ペテロと、かの弟子といひて墓にゆく。⁴二人ともに走りたれど、かの弟子
 ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、
 ヨハネのことです。

⁵屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。⁶シモン・ペテロ後れ来り、
 墓に入りて布の置きたるを視、
 こういつた光景を描いた有名な絵がありますね。

⁷また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。
 ほどいてしまつたわけです。

⁸先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。
 マリヤの言つたことを信じたということですよ。

⁹彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを
 この「べき」はギリシア語の「デイ」という字で非常に強い。甦らざるをえないということ。
 未だ悟らざりしなり。
 それだけでも、まだ復活ということをハッキリ信じていないわけです。

¹⁰遂に二人の弟子おのが家にかえれり。
¹¹然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて、墓の内
 を見るに、¹²イエスの屍体の置かれし処に白き衣をきたる二人の御使、首の
 方にひとり足の方にひとり坐していたり。
 他の福音書には、「立っていた」とも書いてあります。それは立ったり坐ったりしたんでしよう。

¹³而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰か、わが主
 を取去れり、何処に置きしか我しらず』¹⁴かく言いて後に振反れば、イエス
 の立ち居給うを見る、

「イエスの立ち居給う」ということは、マリヤはそれがイエスであることがわからない。とにかく、人が立っているのを見た。

然れどイエスたるを知らず。¹⁵イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を



尋ぬるか』マリヤは園守ならんと思ひて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』¹⁶ イエス『マリヤよ』と
言い給う。

この自分の名を呼ばれた時に、ハッとされたわけです。

¹⁷ イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり

別な福音書では、復活のキリストの足にしがみついたことが書いてあります。

我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」といえ¹⁸ マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々の事を言い給いしと告げたり。

●「平安なんじらに在れ」

¹⁹ この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう戸が閉じてあつてもキリストは入ってくる。全く霊的な不思議な存在です。

『平安なんじらに在れ』

「平安なんじらに在れ」というへブライ語は、「シャーローム・ラーケーム」という。

²⁰ 斯く言いてその手と脅とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。²¹ イエスマた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣わし給えるごとく、我も亦なんじらを遣わす』²² 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう

復活のキリストが靈気を吹きかけた。

『聖霊をうけよ』²³ 汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とどめらるべし』

聖霊の権威のことを言われたわけです。

トマスがまだ信じないで、「釘の痕を見せろ」とかなんとか言うが、「見ずして信ずる者は幸いだ」と²⁹節に出ています。たくさんの徴をキリストはなきつて、それを全部書くことはとてもできないという。

²⁹ イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸福なり』

³⁰ この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。

³¹ されどこれらの事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

●「マリヤよ」「わが主よ」

今日はこのヨハネ伝20章、21章によってお話しするわけですが、いちいち解説するわけ



ではありません。

マグダラのマリヤというのは、ご承知のとおり、悪鬼につかれた女性であった。非常に精神的に危機にあつたわけですね。それが、七つの悪鬼が追い出されたというんですから、キリストに救われた女性の最も著しいひとの一人です。復活の記事になると、マグダラのマリヤが真つ先にどの福音書にも出てます。いかに彼女が本当に救われたか。その喜びが、いかにキリストを慕っていたかということもわかるわけです。

イエスがこの「マリヤ」という名前を呼ばれた。皆さんも一人ひとりキリストから名を呼ばれている。キリストはいかなる人も決していい加減に、十把一絡げには考えられない。一人びとりを本当に顧みておられる。それが人格ということ。我々が人格であるということは、神さまから絶対に他のものと比較することのできない意味において顧みられているということ。だから、人間というものは、誰がどうだこうだというようなことを決して比較してはいかん。一人びとりはそれぞれ神さまに、その過去も現在も未来も深く顧みられている。のつぴきならない道を歩ませられているわけです。

本当にキリストから名を呼ばれた時に、これは痺れるですよ、からだが。私は昨日の晩、それを体験しました。キリストの言は霊言ですから。

「わが言は霊なり、生命なり」

という。聖書の次元というものは、申し上げているとおり、これはドラマであつて、絶対次元が相対次元に切りかかっているところのドラマですから。いい加減な気持で読めないんです。だから、自分がこの時に、マリヤにならなければダメです。

「マリヤはそうでしたか」

ではない。キリストは一人びとりの名を呼んでいるわけです。それに対しては、「ラボニ」「アドナイ」「主よ、わが主よ」と応える。私たちが祈る時に一番密接な言葉は何といっても、「主よ」です。キリストにとっては、「神さま」「父よ」でした。私たちにとっては、「主よ」です。

「汝ら、祈るときにかく祈れ」と言つて、

「天にまします我らが父よ、」

と教会ではやっている。悪くはない。けれども私は、主が前面に立たなければ、「父よ」と言えない。「主よ」と言つても、もちろんその奥には「父よ」であるし、「父よ」と言つても、その前には「主よ」と。それだけの自覚はハッキリ持つてください。

マリヤは愕然として、この現実に基づくつて、

「われは主を見たり」

と言つた。マリヤはしがみついたかもしれません。でも、キリストは、

「触るな」

と仰つたんでしょう。まあそれはどつちでもかまわない。実際、キリストは幽霊ではないですから、そのあとで書いてあるとおり、トマスにちゃんと見せてやつた。とても想像も



つかない驚くべき現実ですから、これは本当に降参してしまう。主を見たということ自身がもう救いですから。あるいは、主の声を聞いたとかね。なにも私は神秘的な体験をお勧めするわけではありませんけれども、そういう聖書の現実を霊的信仰においてははたと受けとられるわけです。

●「聖霊をつけよ」

「平安、汝らにあれ」

と。私は手紙の封筒に必ず「平安」とお書きします。「平安があなたにあるように」という祈りの意味で書いている。私は手紙でもハガキでも、「祈る」と書いたら、必ずその瞬間に祈りますから。決して偽っていません。

「平安、汝らにあれ」とか、「平安、汝にあれ」という。非常にこれはありがたい言葉ですね。

「私が平安を汝にやるぞ」

という言葉です。「平安」というのは、

「どんな運命環境になっても大丈夫な事態だよ」

ということですよ。ヘブライ語の「シャーローム」というのは挨拶ですからね、「こんにちは」でも「さよなら」でも。大した挨拶です。本来はそこから来ているんだから。日本語の「さよなら」は、「さらば」と言つてあきらめるような言葉でしょ。そういうことなら仕方がありません。どうも、日本人はそういう点ではなにか情けないように思う。ドイツ語では「アフビーダーゼーエン」「またお会いするまで」という。「グッドバイ」はいいですね、「グッドバイ」ですから。「シャーローム」というのは、

「神から賜るところの平安があなたにあるように」

ということですよ。

21 イエスマた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣わし給えるごとく、

我も亦なんじらを遣わす』²² 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊を

うけよ』

ここで大事なことは22節に、

「聖霊をうけよ」

ということがハッキリ言われていることです。キリストがここで、

²³ 汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とどめ

らるべし』

と言われたが、これはうっかりやってはいかん。キリストは聖霊の権威のことをハッキリとそう仰つたけれども、我々罪びとがいきなりそれをやっては間違いを生ずることがありますから。しかし、聖霊の権威において神の審判を言うときは、それは恐ろしいですよ。ペテロがそれをやりましたからね。あのアナニヤ夫妻がたおれて死んでしまったですよ。



そういう権威がこの聖霊にはあります。これはペテロの権威ではない。聖霊の権威なんです。聖霊は審判と救いと両方持っていますから。

この記事で「平安」と「聖霊」、それから「マリヤよ」と呼ばれたこと。この三カ所は特に大事なところですよ。

●キリストの栄光の証者

十字架にかかったキリストが、贖罪は既に果たした。

「ただ一回これを果たした」

と、ヘブル書9章にあるとおり。十字架で私の過去も現在も未来も全部、贖われています。人が何と言おうと私は贖われています、ハッキリ。そういう、

「キリストの絶対恩寵をお前に与えてあるんだ」

と。だから今度は、無私、私が無い、罪から解放された者であるから、

「この聖霊を受けろ。そして、わが証人となれ」

ということですよ。使徒行伝の始めの方に出てくる。

「聖霊を受けると、力が汝らに着せられる。そして全国、至るところ地の果てまで

もわが証人となれ」

と。証者、証人です。キリストの証し人。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、内的には言えなくてはいかん。キリストの、

「我を見し者は父を見しなり」

と同じように。それが証者ということですよ。使徒行伝は、ペテロ、ヨハネ、パウロ、これの証者たる姿がもの凄く現われたわけですよ。彼らを通していかにキリストの福音が力強く展開していったか。いわゆるお説教ではないですよ。そんなものはいくらやったって、魂の世界はごまかしがきかんですから、魂が本ものに触れるまではどうにもならん。そういう福音の証者となること。これが人生の、我々の目的です。証者たることは即ち、神・キリストの栄光を現すこと。栄光の証者です。十字架の証者であり、また栄光の証者です。だから、

「聖霊を受けよ」

とここにハッキリ言われているこの事態は、十字架を経たキリストは甦って、甦ったら霊生が顕れて出てきた。ただ息を吹き返したなんてことではない。キリストの本来持っているところの霊生が顕然として現われた。

「甦り」という言葉がヘタすると何か息を吹き返したように思われるけれども。昔から、

「キリストは復活したか、復活しなかったか」

なんてくだらないことを言っているけれども、本来、キリストは甦らざるをえない。霊生



を現さざるをえない。十字架の贖罪を遂げたら、必ず彼は顕現せざるをえない。変貌の山をもつと具体的に現された。四十日間、現われた。それから天界へ行かれたでしょ。罪なき彼が死ぬわけではないんですよ。エリヤやエノクよりもつと素晴らしく天界にいきなり行けた人なんだから。キリストは十字架という贖罪をしなければならぬ。やむをえずしてかかったわけだからね。

「我みずから棄つるなり」

と言っている。彼らにとつつかまって十字架にかかったのではない。具体的にはとつつかまっただでしょう。けれども、彼は天の十二軍をもつてひっくり返すことができる人だった。まあ大変な人です、イエスというひとは。お釈迦さんなんかとてもかなわない。何といつても、キリストはケタ違いです。このケタ違いな人に、福音書を読んで、呑気な顔して読めるものではないですよ。だからもう……(異言)。とつつかまると大変なことになる。もう全身が痺れてしまう。キリストにつかまっただと、どうにもならんですよ。皆さんはちよつと、何と言うかね、文化人すぎるね、私みたいなバカにならないと。元始人にならないと。判断が多すぎる。もつと単純になつてください。

●「イエスは十字架に」

この20章のところはそういうわけです。私はこの20章を読んでいて、すぐ讚美歌ができてしまった。今、私ひとりで歌いますから。誰も知らん。「北のはてなる」の譜でもつて歌える。

A 23 「イエスは十字架に」——ヨハネ伝第20章——(1981年4月17日作、讚美歌)

214番「北のはてなる」の曲で)

1 イエスは十字架に あがないの死を

果たし給うて 葬られぬ

主の日の晨あした 死に勝ち給い

靈震をもて 石扉とびら倒す

2 マリヤ・マグダラ 石扉なきを見

ペテロ、ヨハネに その旨告ぐ

弟子たち走り み墓を見しに

主の影見えず おどろきたり

3 泣きつつマリヤ み墓のうちを

見れば二人の み使つかい立つ

白き衣の み使は言う

「女よ何ぞ 泣き悲しむ」

4 「誰かわが主を とりのぞけしや



いずここにおきし
彼女振り向けば

「女よ泣くな

5 マリヤはそれを

「君よ何処に

主はねんごろに

声におどろき

6 マリヤ迫りて

「われに触るな

父のみ許に

マリヤ、弟子らに

7 その夕主は

入り給うて

「我れ汝らを

祈り入りてぞ

我れ知りたし」

人影のあり

誰をさがす」

園守と見て

彼を置きし」

「マリヤよ マリヤ！」

「ラボニ わが師！」

主に寄りすがる

弟子に告げよ

われは昇ると」

主を証しす

閉じたる室に

「シャローム ラケム！」

世につかわさん」

聖霊受けよ！

●そこに御霊のキリストが生きているか

では、21章に入ります。前に、ルカ伝5章に書いてあるとおり、キリストは、

「深みに乗りいませ」

と言われた。そして、

「あなたの御言だから、私は従います」

と、ペテロが行って見たら、大変な大漁であった。二艘の舟に溢れるばかりであったということが書いてあります。今度は、復活の主がまた同じようなことをここでなさっているわけです。もう、甦りの主ということがハッキリわかっています。主なり」とペテロはハッキリ言いました。採った魚が「百五十三尾」と、ちゃんと数えてある。いかにこの記事が現実であるかということがわかります。

「来りて食せよ云々」

と。いかにキリストが地上にあつたとき、また十字架を経て甦りの生命を現実に現し、今度は天界に行かれてからは、聖霊を通して我々にじかじかに現われたもうか。

聖霊によって我々に現われている御霊のキリスト。これが非常に今は現代のキリスト教は希薄になってしまっている。どうにもならん。だから、ペテロ、ヨハネ、パウロ、ヤコブ、使徒たちのこの次元に立ち返れと、私がしきりに言うわけです。元始に還らなくてはいかん、元始に還ることが本当の前進であると申し上げておられます。カトリックでもプロテスタントでも無教会でも幕屋でも何でもいい。問題は、そこに本当に御霊のキリストが生



きているかということだけです。その根底は、十字架を本当に受けとっているかということとです。パウロの、

「われキリストと共に十字架せられたり」

なんていう言葉を本当に冥想してごらん下さい。いい加減な言葉ではないですから。

「祈る」というのは、そういった根源の現実に関心を入れるということなんです。いいですか。何かお願いすることではない。そういった根源の現実に関心を入れることが祈りですから。それをしなかったら、いくらお願いしたって、もうくたびれてしまうくらいのもんですよ。どうぞ、祈りの本当の秘訣はそこにあるということをお身に付けてください。

●「私を本当に愛しているか」

今日、一番申し上げたいのはそのあとなんです。私は復活節にヨハネ伝21章の後半のところを語るの、あるいは今日が初めてかもしれないに、私は昨日の晩、本当に夜中にキリストにでつくわしました。その前にももちろん私はこれを読んでここをやるうということを決めてはいた。その祈りがなお強く聞かれたんでしようけれども。

15 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、
汝この者どもに勝りて我を愛するか』

この「愛する」は「アガパオー」という字ですが。天的な愛のことです。キリストは特に、「汝この者どもに勝りて、他の弟子たちに勝って、我を愛するか」

とペテロに——ヨハネはキリストの特に愛する弟子ではありましたが——なおペテロにこういうことを言っておられる。ということは、単なる比較のことではない。単なる比較と思つたらいかん。キリストの言葉に躓かないように。

「何ものよりも、とにかく私を本当に愛しているか」

と。「愛しているか」と、むしろ日本語では言つた方がいくらいです。

ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』

この場合の「愛する」は「フィレオー」という別な「愛する」という言葉が使つてある。

イエス言い給う『わが羔羊を養え』

と。特別に、すぐ中身を変えて、「私の羔羊どもに食物を与えよ、飼え」と。

16 また二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』

同じ言葉です。

ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』

ここでもやはり、ペテロの方は「フィレオー」という字が使つてある。

イエス言い給う『わが羔羊を牧え』17 三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、

我を愛するか』

この時はキリストが特に「フィレオー」という、ペテロと同じ言葉を使っている。



ペテロ三度『われを愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。』

もう一遍言つた。

18 誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』彼も殉教の死を遂げることを、暗にこう言われたわけです。

19 是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』。

十字架道を歩けと。

20 ペテロ振り反りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。

ヨハネのことです。

これはさきに夕餐ゆうげんのとき御胸によりかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と問ひし弟子なり。21 ペテロこの人を見てイエスに言う『主よ、この人は如何に』

「ヨハネはどうなるか」なんていうことを、ペテロがここで聞いているが、「それは関係ないぞ」ということ。そこに問答がありますね。ヨハネはなおパトモスで最後の黙示を受ける使命がありましたから、新約聖書の最後のところをヨハネは書かなくてはならない。

● 十字架で私を愛してください

ここに、「愛するか、愛するか」とある。

「心を尽くし精神を尽くし力を尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

という。私は無教会時代には、

「さあ、神を愛するなんて言つたつて、愛すべしと言われてもこれは困るよな」

と思つた。それから、「キリストを愛する」と言つたつて、これはどうもピンとこない。ペテロは三度聞かれた。それで、一生懸命で祈つて愛したつて、それはまあくたびれてしまいますよ、そんなのはまだ本当の愛ではないから。

讃美歌461番に、

「主われを愛す」

とある。あれは讃美歌のアルファでオメガです。この「主われを愛す」を本当に受けとれば、キリストを愛せざるをえなくなる。これはヨハネの書簡にもあるとおり、神が先に愛し給うたんだということです。「主われを愛す」は何かというと、これは感情ではない。具体的にどこで主は私を愛してくれたか。十字架で愛してください。誰が十字架で私を愛してくれますか。

人間は何のかんのか言っている。あなたがた一人びとりはいろんな体験がおありでしょ



う。いかなるプラスもマイナスも、人間的なそんな相対的なプラスもマイナスも問題じゃない。主は私を完全に愛しておられることは、この我執という罪を全部除けて、そして聖霊を与えてくださった。これが「主われを愛す」の内容なんです。私にとつては、もうまさにこの他に内容はない。キリストが十字架で私をすつ飛ばして無者にしてくださった。私無き者にしてくださった。根底において。キリストの無者です、私は。そうすると、キリストのまた無限無量者にされる。聖霊だから。御霊だから。

御霊というものの内容がもの凄いものであることにみんな気がついていない。いろんなことで現われる。勉強の上でも、仕事の上でも、人を助ける上においても、何でも。それが、主が私を愛してらっしゃるところの、皆さん一人びとりを愛していらっしゃるところの内容じゃないですか。「主われを愛す」というこの十字架・聖霊の愛の内容に圧倒されて、

「私を愛するか?」

と言われたって、もうキリストにしがみつかざるをえないではないですか。キリストに行かざるをえないじゃないですか。どこに行くんですか。もう私は異言が出そうで困る。何が「キリスト教」か。「教」だなんて言っているからダメ。「キリスト」だけでたくさんだ。「教」の字は要らん。「キリスト教だ」なんて言ってもつたいぶって、聖書研究会だの、解釈だの、デイスカッションだのと、何をやっているかと。私はデイスカッションなんか大嫌いだ。もうキリストの中に平伏すよりか言葉がない。デイスカッションの結果が出て、それが何になるんですか。

●ペテロの召命

ヨハネ伝21章の、

「汝われを愛するか」

という、このキリストのペテロとの会話はペテロの召命ですよ。ペテロがここで召しを被ったわけです。パウロはダマスコ途上でひっくり返された。ペテロは復活のキリストがまずこのようにしてペテロに現われた。何といつても選びの器です。福音書のペテロは波のように躓いたり転んだりやっていた。使徒行伝のペテロはどうですか。ハッキリ、聖霊の事態でしょ。

「汝知り給う」

でいいんです。「汝を愛する」ではない。もう、「汝知り給う」と。

「私の心はあなたがご存じのとおりです。あなたに圧倒されて、あなたにしがみつかざるをえません」

と。その夢ならざる現実を昨日の晩、私はキリストから受けとつて、あんなに痺れたことはないね。不思議な異言が出た。だから、

「わが羊を牧え」



「はい、これから本当に人の救いのためにやります」

と。私の生涯はこれからが本番ですから。イスラエルの旅が私にひとつの徹底的な峠を越させた。あの旅は本当に身にしみ、肌を感じ、骨の髄まできたような旅でした。

私たちはなるほど、

「心を尽くし精神を尽くし力を尽くして主たる汝の神を愛すべし」

とは、

「お前は愛せざるを得ないね、全存在をもつて」

ということ。あれは「愛すべし」ではない。「愛せざるを得ない」と、もう命令ではなくて、現実を仰っているということです。

私みたいな乱暴なやつはないかもしれませんが。「すべし、すべからず」なんて言っている世界ではないから。「そうである」「させるぞ」という事態です。もう私は今、本当は叫びたい。皆さんがびつくりするからやめるけれども。こないだ、第三回目の集会の終わりで私は叫んだ。もう感動して、みんな泣きました。詩篇によく「叫ぶ」という言葉があるが、なるほど叫ぶというのはそういうことだと。神さまに、キリストに向つて全存在が燃えるがごとくいくのがこの叫びというやつです。なにも大きな声を出すことがどうというのではないけれども。

ペテロはこの復活のキリストから深く顧みられました。三度キリストを否んだ。そうしたら、キリストはペテロに三度このようにして仰った。もう十字架を通っているからキリストはハッキリその救いの現実を言つて、ペテロを召命なされた。召された。だから今度は、ペテロは祈っていたら聖霊が臨んできて、ペンテコステでもつてどうですか、最初のペテロのこの演説は。そのように変わるんです。研究じゃないんです。いいですね。もうそういう現実に入らなかつたら、つまらないですよ、信仰なんて言つたつて。よく、信仰の偽善者がいるよ。

「偽善なるかな、学者、パリサイ人」

とやられるよ、キリストに。いいですね。

御霊の力はいろんなことに働きますから。皆さんも本当に主に愛されているということ。それが本ものになると、もはや他のことはどうでもよくなるですよ。くだらないことを言わなくなる。そのようにして、おのずから隣人を救つていくことになる。福音は決して遠慮してはいかん。どうぞ、証者である自覚をしてください。今はもう遠慮なんかしているときではない。福音のためには恥を負つていかななくてははいかん。聖霊の力、権威というのはそんなもんじゃないんですから。いいですね。キリストに圧倒されて進んでいきます。

あまりこの現実が凄いのだから、私は言葉にならなくて困るんです、今日は。それでは、午前の話はこのへんにおきましよう。

